

【3】 未来に向けて

我々の10年間、そしてこれから

業務執行理事（事務局長）

中西秀彦

10年前、我々はXMLによる学術情報の流通普及を目指して、学術情報XML推進協議会を立ち上げた。本記
念誌にある通り、一定の成果はあげてきたと自負している。

しかし、それが論文情報のXML化、あるいはJATS日本語化という技術的側面に偏りがちであったことは否
めない。加盟団体に印刷会社が多く、学協会からのXML化要求に対応する体制づくりをまず迫られたため、
技術的情報に対するニーズが高かったということが背景にある。しかし、このことは、我々はXML化そのも
のを推進したのではなく、XML化を前提としてその技術対応を行ってきたにすぎないということでもある。

10年前の時点ではXML普及は国際的情勢から見て、自明であり、我々は当然の如くXML化を求められると
いうことを無意識に前提としていた。これはXML普及を甘く考えていたことに他ならない。「学術情報XML
推進」を唱っていないながら、我々は推進されるであろうXMLを技術側面から支えるという受け身の姿勢でしか
なかったのではないか。その意味で我々は学術情報XML化を推進してなどいなかった。

しかしこの間、2017年のMEDLINE事件（座談会p.16）など、日本からの学術情報がXML化されていな
いばかりに、日本からの学術発信が阻害されるという事件が実際に起こってしまった。これは学術情報XML
推進協議会としては猛省しなくてはならない。我々は「学術情報のXML化を推進する」という原点に立ち戻
り、「XML化のための技術的な対応」はもちろんだが、それだけではなく「XML化そのもの」をも活動の対
象とすべきではなかったのか。

特に、日本語文献のXML化は日本の我々こそが推進すべきであった。ただ、日本語文献のXML化には幾
多の困難が立ちはだかった。まずXMLという構造そのものが欧米の言語を前提としているという問題があっ
た。その上、従来、日本語文献の組版に対する要求が高かった。高度に見開きページの視認性を追求し、図
や写真の配置、文字配列構成など、極端な修正と訂正を繰り返す学術刊行物はまだまだ多い。その結果学術
情報発信がオンラインを中心とするようになって、ページ視認性に優れたPDFが情報発信の中心となっ
ている。これは本質的には日本語が表意文字である漢字を主体として、文字そのものが意味を持つことは無関
係ではないだろう。しかし、それを日本語組版の本質として放置してしまったことが、XML化を阻害してき
た。我々は日本語組版に対する高度な組版要求に対し、あまりに劣勢であり、XML化を阻害してまで墨守す
る必要があるのかという根源的な疑問をすら発することがなかった。

極端なページ視認性の追求はXML化において、無用な例外措置を生む。一見して人間が見やすい組版の方
を当然の如く優先してきたが、それは文書構造、つまりXML構造の破綻をもたらす。もはや文献は人間が見
るだけではない。まず検索エンジンが、そしてこれからはAIがその内容を読んでいく。つまり機械こそがこ
れからの文献流通の主役であって、そのためには機械可読性が追求される必要がある。

我々は今ここで声をあげたい。紙の上での視認性を前提として形成された組版ルールはそろそろ終わりにし
なければならない。なぜなら、これからの情報受信の主体は機械がまず担い、そのためには情報発信は紙では
なくオンラインでなされるからだ。いやなされなければならないからだ。オンラインであればこそ、各種の

引用情報やデータベースともシームレスに連携が可能であり、紙の物体としての呪縛から放たれることで、学術情報発信は学術発展の中心存在となりうる。その情報は人間の視認性を重要視した紙組版の残滓であるPDFでなく構造化文書であるXMLであるべきなのだ。

XML時代にふさわしい組版ルールとはまさにJATSのようなスキーマである。スキーマを極めることこそが、まず重要であることは論を待たない。もちろん、我々はXML推進を教条的にとらえているのではない。最終的には情報流通はXMLとは別の形になることはあるかもしれない。ただ、それは間違いなくコンピュータネットワークによるものであり、断じて紙の上にはない。どのような形になるにせよ、現在のXML推進は新たな時代の情報流通への必須条件である。それはまず達成しなければならないメルクマールである。

そのために我々に何ができるか、何をやるべきか、自らに問い続けることが今後我々に課された使命である。